慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	財政学の社会理論
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.2 (1934. 2) ,p.181(1)- 208(28)
JaLC DOI	10.14991/001.19340201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮內省御用達
株式會社 東洋軒
麹町區有樂町一ノ一〇 三信ビル內
電銀座 三、四七四 三、五六二 三、八六七 四、〇七八

東洋軒支店
□新橋驛階上 電話銀座四七〇
□帝國劇場內
□新橋演舞場內 電話銀座二、七二八
□列車食堂東京事務所 電話丸ノ內一、六六三
□赤坂三會堂內 電話赤坂一七
□赤坂錦水 電話赤坂九二一 九二二 一四一一

三田學會雜誌 第二十八卷 第二號

財政學の社會理論

永田清

一

財政學は、一般社會科學中に於て、最も固定的なる體系を具へたるものの如くである。此體系は略、十九世紀末迄に完成された。謂はば、財政學の開花結實の時期は、ワグナア、シュタイン、ルロア・ボオリュウ、バステエブル等の時代と謂へるであらう。然し體系の固定は決して其の完成を意味するものではない。他社會諸科學がそうであるやうに、財政學も亦、其の對象となるべき社會形態の變化に伴つて、其理論の類型を更新する。これ、體系の固定靜止のあり得べからざる所以であつて、殊に近時の如き財政現象の著しき變化は、舊來の財政學說に對する本質的再吟味を要求する。無論、財政學の對象が國家其他公共體の營む經濟活動であることは異論がない。然し、舊來の

財政學が財政現象の主體たる此れ等社會形態の意義を先づ究明しなかつた爲め、其理論體系は甚しく行政技術論に墮して居る。それは然うならざるを得なかつたのである。蓋し、一切の財政理論は斯る財政現象の主體に對する社會理論的說明を核心として科學的に決定せらるゝからである。說明の重心を失つた論策は、試みにブルノ・モルの用語を藉りれば、徒らに財政現象の「有用及び必要、合目的性若しくは正當性と謂ふが如き概念のみを論じ、疑もなく、科學の領域を離れて全く政策と謂ふ動搖板の上に身を据へた」（註一）のである。

註一　Bruno Moll, Probleme der Finanzwissenschaft, S. 29

更に、理論の歷史的被制約性の問題がある。財政學の如く、權力主體の經濟活動を研究對象とする社會科學に於ては、權力の移動による社會體の歷史的變革に依つて、其の理論は甚しく制約せられる。權力組織としての政治體の嚮道理念が何であるかと謂ふことに從つて財政現象の根本觀念が決定せらるゝ譯であるが、斯る權力體其れ自體は社會組織の歷史的過程に於て理解されねばならぬ。舊來の財政學が此の點の明瞭な說明を欠いだことは確かに弱點であつた。

一概に、强制公共體(Zwangsgemeinschaft)と謂ふも、其は決して普遍的意義のものではない。試みに封建國家と市民國家とを對照せよ。共に强制公共體たることに於ては同一であるが、其內的意義の相異は極めて明らかであらう。絕對主義時代に於ける警察國家は其れに照應する財政學を樹立した。これがカメラリズムである。然るに身分制度を否定する第三階級の國家は各個人に其人格的自由と其所有とを保障する。換言すれば、斯る國家の機能は各個人の經濟活動が其全幅の力を發揮するが如き社會秩序を維持することであつた。斯くして自由主義財政學が成立した。國家の夜警的理念は同時に最も安價なる國家を要求する。財政主權の獲得者は、更に進んで、斯る公的負擔を隷屬階級に轉嫁する。マルクスに從へば、「租稅は一階級を優遇して他階級を抑壓することが出來る。吾人は斯る例を金權貴族の支配のもとに於て見るのである。租稅はブルジョワジイとプロレタリアとの社會の中間層を減すにすぎない。斯る中間層は、其地位上、租稅の負擔を他の孰れの階級にも轉嫁することが出來ないのである」（註二）。

註二　Aus dem literarischen Nachlass von Marx u. Engles, Herausg. v. Mehring, III Bd., S. 436

又ラッサアルは謂ふ、

「私は中世に於ける貴族的土地所有の租稅免除を指摘して、支配者たる特權階級は、何れも公共福祉を維持する爲めの費用を、抑壓せられたる不所有階級に轉嫁せんと試みるものであると謂つた。ブルジョワジイも亦全く同樣である。成程彼等は、租稅を免ぜられんことを欲するとは公言出來ない。彼等の表明せる原則は寧ろ、各人は其所得に應じて納稅すべしといふにあるを常とする。併し乍ら、彼等は此處でも亦た、直接稅と間接稅との區別に依つて、蔽れたる形に於て同一の結果、少くとも殆ど同一の結果を成就するのである。……間接稅は、ブルジョワジイが依つて以て大資本の爲めの租稅免除を實現して、國家の費用を社會の比較的貧困なる階級に負はしむる爲めの機關である」（註三）と。

註三　F. Lassalle, Die indirekte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen (Gesammelte Reden u. Schriften. Herausg.

v. Bernstein Bd. II., Ss. 301-304) 同一の章句は其「勞働者綱領」中にもある。Gesammelte. Herausg. v. Bernstein, Bd., II., Ss. 180-183 小泉教授譯(岩波文庫)三八—四一頁

この間接稅論はシスモンデイの消費稅論より藉り來つたものである。兩者の思想的連繫に就ては稿を改めて說くつもりである。

この種の結論は、共に彼れ等の社會理論より派生したものである。即ち、マルクスは國家を以て階級支配の用具と觀た。ラッサアルは市民國家に於ける自由を强者富者の弱者貧者を搾取する自由と解する。この理論の適用が前述の如き結論となるのである。謂はば、强制公共體に對する社會理論的理解が其經濟活動の基本的解釋を決定する。これ、財政現象の主體たる社會體の本質的說明が先づ必要なる所以である。

近時、財政學は漸く以上の意味に於ける根本的理解に進みつゝある。ゲルロフはこれを包括的に「社會學的方法」と呼んで居る(註四)。財政現象は其の時々の社會的條件を問題とするのが斯る財政學の固有性と謂へるであらう。財政現象と社會關係との連繫に基いて說く財政學說はまた其基本的なる理解に基いて二者に分たれる。一は、財政現象を社會關係の產物と觀て之を社會學的に理解するもの、即ち社會學的財政學であつて、他は、財政現象を以て社會關係の鍵鑰と做すところの所謂財政社會學である。共に社會理論を基礎としたる財政學たる點に於ては同一と謂へる。以下、私は此兩者の理論に就て順次論究しやうと思ふ。

註四　W. Gerloff, Grundlegungung der Finanzwissenschaft (Handbuch der Finanzwissenschaft I. Bd., S. 22).

II

ドゥエスは既に早く "Sociologie financière" なる名辭を使用して居つた(註五)。併し乍ら、このことは直に彼れが前述の如き意義の財政社會學者であつたと謂ふ意味ではない。彼れは唯だ財政學の社會理論的認識を主張したにすぎないのである。

註五　H. Denis, L'impôt, Ier Leçon, 1889

彼れに從へば、一國の豫算發展史は其歷史哲學の一象相である。蓋しこゝに、年々具體的なる形態に於て、一國の欲望・熱望・滅亡・物的力の進步等が表明されるからである。斯る研究は無論一國經濟文化發展の研究と分離出來ぬ。此等は一丸となつて社會の要求を構成する。而して、政治體がこれを解釋して社會生活に浸透せしめるのである。斯る機能を持つ國家固有の生命は社會の僞らざる生命の一延長にすぎない。然るに、國家機能の遂行は富の支出に依て可能となるから、從つて、社會の要求は結局公的支出に依つて表されることとなるのである。他方、斯る支出に應ずる收入は、個々の私經濟單位より徵收されると謂ふ意味に於て、全體的なる經濟條件に依存する。國家は社會體に順環する富に寄生し、其機能は社會的環境の壓迫のもとに發展するものである。この故に豫算の進化は常に社會其れ自體より派生するところの二個の概括的原因に基いて成立する。一は社會的要求であり、他は富の進步を決定するところの經濟的條件である。從つて、財政學は、科學的基礎をもつ爲めには、全社會科學との關聯に於て考察されねばならぬ。總ての社會現象間に存する相互依存の爲めに、財政社會學は社會學全體に依存する。蓋

し其は、一方、人間社會の自然的發展が國家の機能的活動に於ける外延的及び內包的變化を決定するが故に政治學に依存し、他方、國家の要求を充たす爲めの收入が、富の社會的基本より吸收され、而して社會に於ける富の法則に從ふが故に、經濟學に依存するからである(註六)。

註六　H. Denis, op. cit., Ier Leçon, Place de la Sociologie financière

一般財政學者は豫算を行政技術論的に說明する。然るに、ドゥニスは豫算の機構を以て、社會的動向の最も明確なる表現形態と觀る。其は彼の財政學に於ける社會理論的認識に基くものである。最も正しき意味の財政社會學者ゴルドシャイドは、「國家の機能は主として其家計の機構によつて方向づけられ、豫算は同時にあらゆる觀念形態の粉飾を脫ぎ棄てた國家の骨組みを示す」(註七)と謂つて居るが、斯る說明はドゥニスに依て既に與へられたところであつた。

註七　Goldscheid, Staat, öffentlicher Haushalt und Gesellschaft (Handbuch d. F. I. Bd. S. 148)

然らば、豫算現象の進化と社會體其れ自身との間には如何なる基本的關係が存在するであらうか。こゝでドゥニスは經費膨脹の現象を實證的に說明する。此現象は既にワグナアに依て定式化されたところであつた。即ちワグナアは謂ふ、

「種々なる國、種々なる時代の包括的比較は吾人の問題とする進步的國民に於ては、中央並に地方兩政府の活動が規則的に增大すると謂ふことを示して居る。斯る增大は外延的であり、又、內包的である。即ち中央及び地方政府は絕えず新しき機能を企てると同時に、又、新舊兩機能を一層有效に、一層完全に遂行する。斯くして、國民の經濟的要求は更に廣汎に、更に滿足に、中央及び地方政府に依て充足される。此明確なる證明は、中央及び地方政治單位に於ける必要增加を示す統計に於て見出されるのである」(註八)と。此現象は一般財政學者の注意を惹いた。ルロア・ボオリュウ、バステエブル、アダムス其の他この問題を論じて居る。特にニッチは最も豐富なる統計資料を示してこの現象を說明した(註九)。ロオエブケは、極めて剴切に、これを「經費の雪崩の如き膨脹」と謂ふ(註一〇)。然らば、此現象は如何なる社會的原因に依て生ずるであらうか。

註八　Ad. Wagner, Grundlegung der Politischen Ökonomic, III. Aufl. I. T. 1893 S. 893

註九　F. Nitti, Principes de Sciences des Finances, t. Ier, p. 56-70

註一〇　W. Röpke, Finanzwissenschaft, S. 49

ドゥニスは之を四個の原因より說明する。第一は物價の上昇である。予算が數字的表現であるため、直に物價の影響を蒙ることは異論がない。第二に軍備の永續的影響を擧げる。コントは、サン・シモンに從つて、人類進化の戰爭的段階から產業的・平和的段階に進むと謂つて居る。併し乍ら、近代國家の經濟的條件を觀察すれば、戰爭の永續的因由が明らかとならう。蓋し內國市場の狹隘は必然的に帝國主義戰爭を惹き起すからである。第三の原因は國家機能の內的擴充である。社會生活の諸行爲に於ける國家干涉の增大は既に比較統計の證明するところであつて、其は今後益〻複雜なる形態に於て現れるであらうと謂つて居る。第四は、公的企業の擴大である。國家の產業的活動の

爲めには先づ資本を必要とする。その爲めに、國家は公債に訴へるであらう。この利子と償却とが經費の數字を高めるのである（註一一）。

註一一　H. Denis, op. cit., p. 11-23

以上の諸原因は一般財政學者も之を列擧する。併し乍ら、ドッニスが軍備費膨脹の必然性を經濟的因由に基いて說明したのには異色がある。今、經費の現象は國家機能の內的擴充と帝國主義に基いて創めて本質的に理解される。ロオエプケも亦斯う謂つて居る。

「經費は國家目的に從ふ財政的支出形態にすぎないから、其歷史的發展は、國家觀、國家理想、國家自體の發展を如實に反映する。國家目的の擴大、法治國家の自由理想より文化國家の理想への發展、更に進んで、政治的支配圈の擴張と結び付く經濟擴大（帝國主義）並に其れに伴ふ國家の國民主義的・軍國主義的强調に、國家經費の雪崩の如き膨脹が適應する」（註一二）と。斯くして、近代財政學は、經費の問題に就て、社會理論的認識をもつたのである。

註一二　W. Röpke, a. a. O., S. 49

財政學の基礎を一般社會理論に求めるものに猶ほ、社會學者ド・グレェフがある。彼れは、從來の財政學を批判して、科學的性質を表すところの一般理論とは何等の關係もない單なる經驗的手段の蒐集に過ぎぬと謂ふ。通常、財政學者は、其研究の對象を構成する現象の中に於て、公經濟の恒常的機能を表すものを、其一時的・變化的方面を構成するものから區別しやうとさえ試みなかつた。公經濟若しくは國家經濟は、無論一般經濟科學の一部門である。即ち社會生活に於て特に統制的機能を發揮するところの公社會體の經濟活動が、各個人間の私經濟に對立する意味に於ての公經濟である。この公・私經濟間の區別は嚴密絕對的なる分割線を持たぬ。この境界は社會狀態の變化發展に應じて絕えず移動するのである。併し乍ら、この區別は社會生活の永續的機能に應ずるが故に不變的性質のものである。變化移動するものは單にこの境界のみであるが、斯る境界其れ自體はまた社會體系の一部分と謂へる。而して、公經濟も私經濟も共に社會的なる點に於ては同一であるから、共に社會發展の過程に於て、絕えず其領域と關係とを變ずる（註一三）。

註一三　G. de Greef, L'Économie publique et la Sciences des Finances, IIe éd. p. 9-12

斯くして、財政學の科學的基礎は、ド・グレェフに從へば、斯る歷史的形態からの抽象と謂ふ條件に於てはじめて可能となる。即ち財政學の構成は其の主體たる社會體の歷史的變化に從つて根本的變更を蒙る。斯る歷史性の認識は特に個人主義學派の國庫收入主義的財政理論に欠けて居る。成程、國家の機能は恒常的である。併し、其は歷史的形態に於て絕えず其領域を變ずる。蓋し、國家機能は社會的集團に於ける自覺的意識の維持と發展だからである。從つて、恒常的なる財政理論は、歷史的に變化する國家の機能と其形態との中に理解されねばならぬと謂ふのである（註一四）。斯る前提のもとにド・グレェフは財政學を斯う定義する――「財政學は公的機能の遂行に必要なる社會的富の流通・消費・生產を決定する法則の認識である」（註一五）と。

註一四　G. de Greef, op. cit., p. 14-19

註一五　G. de Greef, op. cit., p. 45

三

財政學の理論體系は公社會體の機能領域に依て決定する。然るに斯る機能の領域は社會史的に制約せられる。このことは、從來の財政思想を社會理論的に分析すれば、明瞭となるのである。

絶對主義時代のカメラリストにとつての中心問題は王侯國家であつた。彼等にとつて、一切の社會理論の目的は如何にして斯る國家の厚生を確保するかと謂ふことであつた。彼れ等は斯る國家の厚生の中に他の凡有る厚生の源泉を見出すのである。而して斯る厚生の鍵は國家の必要を充すべき收入であつた（註一六）。斯くの如き、警察國家に於ける財務行政技術としてのカメラリズムは、封建的家權の自立を基礎として成立したものである。

註一六　A. W. Small, The Cameralists, p. viii

然るに十六世紀より十八世紀に至る重商主義時代に於ける、貨幣調達を目的とする國家權力の強大は、國家をして、發生資本主義に伴ふ私企業の一種に導いた。謂はば、資本主義の發生は、中世的・都市的・建封的權力に對する反對力として、重商主義的國家權力の强大を要求したのである（註一七）。重商主義財政思想は斯くして成立したが、十八世紀中葉より十九世紀中葉に至る資本主義の發展は、國家の目的を以て、法律的制限と獨占に對する自由競爭の保障に限つた。即ち資本主義發展の要素は、國家權力の强大に非ずして、却つて其極端なる壓縮に在つた。換言すれば、資本主義發展の條件として、個々資本の活動力が全幅の作用を發揮する爲めの社會的秩序の維持が、國家の主要目的となつたのである。斯る自由主義的國家觀に最も理論的なる根據を與へたものはスミスであらう。

註一七　W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, I. Bd., S. 369

スミスに從へば、社會を構成する各個人が自然に依て與へられたる性向――彼れの生活を改善せんとする努力又は自利心――に從て活動し、他の同じく自由なる活動を妨げざる限り、其は又全社會の利益を增進するのである。各人が自己の狀態を改善せんとする自然的努力は自由と安全とを以てこれを行ふことが許されて居る場合には、甚だ有力なる原理であつて、獨りこれのみで何等の助力なくとも、ただに社會を富有と繁榮とに導き得るのみならず、また愚劣なる人爲の法律に依て其作用を余りに屢々妨げる障碍に打ち克つことが出來る。奬勵または制限の制度が完全に一掃せらるれば、明白にして簡單なる自然的自由の制度が樹立せられるのである（註一八）。スミスは、斯る理論的根據より、國家の機能を國防・司法・警察行政の三個に限つた。「自然的自由の制度に依れば、君主は唯だ三個の任務を有するにすぎぬ。この任務は重大であるけれども、通常の理智を有するものには簡單に理解される。即ち第一は社會を他の獨立せる社會の暴力と侵略とから防護するの義務、第二は出來得る限り社會の各員を社會の他の各員の不正義又は壓迫から保護すべき義務、換言すれば、正義の嚴密なる行政を確立するの義務、而して第三はこれを設立し維持することが個人又は少數の個人の利益たることを得ないある種の公共事業及びある種の公共的施設を設立し維持するの義務である」。斯る任務遂行に必要なる國家收入の問題がスミスの財政思想を構成する。

註一八　Adam Smith, Wealth of Nations, Cannan's edition, vol. II pp. 184-185

リカアドオの財政思想も亦次の如き自由主義國家觀に基いて居る。――「完全なる自由交易の制度の下に於ては、各國は自然皆な其資本と勞働とを自由に最も有利なるが如き用途に捧げる。此個人的利益の追求がよく全體の全般的福祉と結び付けられて居ることは、驚嘆すべきものである。勤勉を刺戟することに依て、それは勞働を最も有效最も經濟的に分配すると同時に、一般的生産額を增加せしめることに依て一般的福利を普及せしめ、利害と交通との一條の共同紐帶を以て全文明世界を通じて諸國民を一個の普遍的社會に結合せしめるものである」（註一九）。

註一九　Ricards, Principles of Political Economy and Taxation, Mc Culloch's edition. pp. 75-76

小泉教授譯「經濟學及び課稅の原理」（岩波文庫）一一八頁

然るに、十九世紀中葉に及んでワグナアは、「經濟生活に對する國家の地位に就ての一個の新しき第三の理論、即ち警察國家・自由國家に對立して社會的國家を確立した」（註二〇）。斯る社會的國家とは、社會政策的機能を持つところの國家の謂ひである。彼れは、租稅が國家による財の强制獲得であるところから、之を以て個人主義社會に於ける財産及び分配の不公平を矯正する社會政策の手段に利用しやうとした。即ちワグナアに依れば、租稅は、其れを以て支出を辨ずるところの純財政的目的の外に、猶ほ、國民所得の分配、個人所得消費の統制、一般に富の分配を公正の概念に從つて改變するを目的とするところの社會政策的目的を持つのである。

註二〇　J. Brandt, Die wirtschaftliche Betätigung der öffentlichen Hand, S. 20

ワグナアの社會的國家の財政理論は自由主義經濟組織の成熟に對する反動と觀るべきものではあるが（註二一）、其は未だ自由財政思想の根本的批判ではない。蓋し、ワグナアの社會政策的意圖は資本主義經濟組織の發展より生ずる弊害除去を目的とするものであり、且つ租稅國家を中心とする公社會體の活動を基準とするからである。然るに近時租稅國家の危機は國家自體の經濟的活動を要求し、同時に財政現象に對する社會理論的考察を呼び起した。其最も顯著なる財政理論はゴオルドシャイドの財政社會學であらう。

註二一　J. Brandt, a. a. O., S. 21

四

ゴオルドシャイドの財政社會學はまだ體系化された財政學ではない。彼れは多くの著作を發表したが（註二二）、遂に財政社會學なる標題のもとに斯る體系的財政學を說くことなくして逝いた。彼れの最後の論文はグリュンベルグの生誕七十才祝賀論文集に揭載されたる "Die Zukunft der Gemeinschaft" であるが、其は彼れの財政社會學の適用としての社會學に關する研究であつて、財政社會學の體系に就ては論究して居らぬ。從つて、彼れの財政社會に關する直接の勞作は、大戰後の財政的混亂に際して發表したる

"Staatssozialismus oder Staatskapitalismus, Ein finanzsoziologischer Beitrag zur Lösung des Staatschulden-Problems, 1917. 及び Weltwirtschaftliches Archiv 9. Bd. (1917) 寄稿の "Finanzwissenschaft und Soziologie"

並に「財政學全書」第一卷の "Staat, öffentlicher Haushalt und Gesellschaft. Wesen und Aufgabe der Finanzwissenschaft vom Standpunkte der Soziologie.

であらう。

註二二　本文掲載以外の彼れの主要著作を擧ぐれば

Zur Ethik des Gesamtwillens, 1902

Grundlinien zu einer Kritik der Willenskraft, 1905

Entwicklungswerttheorie, Entwicklungsökonomie, Menschenökonomie, 1908

Höherentwicklung und Menschenökonomie, 1911

Sozialisierung der Wirtschaft oder Staatsbankrott, 1919

ゴオルドシャイドに從へば、財政社會學の本質を最初に述べたものは、カアル・レンナアであると謂ふ（Das arbeitende Volk und die Steuern, 1909 ——ゴオルドシャイドは此書名を書き違へて居る—— Handbuch d. F., I. Bd., S. 164)。併し乍ら、此言葉は其儘受取ることは出來ぬ。何故ならば、レンナアの前掲書を讀むものは、ゴオルドシャイドに於けるが如き財政社會學の片鱗をさえも見出すことが出來ぬからである。事實上、レンナアの著作は、彼れ自ら謂ふ通り、「社會主義的觀察による財政學序論の試みとして妥當する」（註二三）。其は單に財政問題に關する社會主義的勞作に過ぎないのである。試みに此書の中から財政問題に關する根本的理解となるべき二三の說明を引用しやう。

「課稅を巡る鬪爭は市民國家史に於ける最も重要なる部分である。從つて、吾々は先づ租稅現象の基本を理解しなければならぬ。……而して租稅の最後の全般的源泉は勞働である。……利潤・利子・地代が資本主義天界に於ける三位一體であるならば、勞銀は資本主義地獄に於ける死刑費用である。……財政高權を巡る權力鬪爭に於て、各階級は各特殊の租稅理念・課稅の正しき體系を展開する。斯る正當性とは則ち租稅を他の階級に支拂はせると謂ふことである。……所有階級は、間接稅の設定に依て、中世に於ける貴族及び敎會と等しく、實質上の租稅免除權を享得して居る。無論、資本家階級は國庫に租稅を納入しないと謂ふのではない。併し乍ら、總ての所有階級は斯る納入金額よりも遙かに多くの稅金を回收するのである」（註二四）。

註二三　Karl Renner, Das arbeitende Volk und die Steuern, Vorwort S. 1

註二四　K. Renner, a. a. O., Ss. 6-32

斯る解釋はレンナアの獨創ではない。既にシスモンディ、ラッサアル、一般マルクシストに依て理解されて居る。彼れを以て、特に財政社會學の建設者と做す理由は無いのである。

また、カアル・マンは、財政社會學なる名辭は之を用ひなかつたけれども最も固有の意味に於ける財政社會學を建設したものはアルバアト・シェフレであると謂ふ（註二五）。シェフレは國家機構を國家財政の上層建築として理解する。併し、彼れは財政理論を以て社會學の根幹とするのではなくて、單に財政現象を一般的社會關係に於て理解したと謂ふにすぎないのである。從つて、彼れの財政社會學は游離的に考察されてはならぬ。其は彼れの經濟社會學との密接なる連繫に於て說明されて居る。

註二五　Gründer der Soziologie. Herausg. v. Karl Mann, S. 50

シェフレは經濟的國家機能を三個の部門に分割する。第一に、國家は法律・治安・組織に基く共同需要の經濟的充

足の機關である。第二に、其は猶ほ公的權力を以て私經濟的需要を充たし、經濟警察としての作用を行ふ。第三に國家は法律並に組織機能を實行する。此意味に於て、其は「全體的道德社會の人格化」である。而して公共需要の充足にとつては、二個の行爲を必要とする。第一は公的手段の調達、第二は斯る調達物を一般的利益に於て消費することである。斯る二重の機能から、シェフレは財政と國家經濟とを分離する。即ち財政は、其本質に於て、國家的營業組織にすぎない。然るに、國家經濟は國家的消費組織であると謂ふ。マンに從へば、斯る區別は單なる概念遊戯ではない。財政と國家經濟との根本的區別は次のことを意味するからである。即ち、財政は國家の本質要素ではなくて單なる歷史的範疇であらう。然るに國家經濟は永久的性質のものである。其は國家と共に與へられるものであり、私經濟に基礎づけられたる財政が消滅し、其が集合的收入組織によつて代置せられる場合に於ても猶ほ存續するであらうと。マンはこの區別を以て財政社會學への第一歩であると述べて居る(註二六)。

註二六　Gründer der Soziologie, a. a. O., Ss. 50-53

シェフレの財政理論が社會學的根據をもつて居ることは異論がない。併し乍ら、このことを以て、直に彼れを財政社會學者と謂ふことは出來ぬ。嚴密に謂へば、彼れは社會學的財政學者であつて、前述のドゥニス、ド・グレェフと同一の範疇に屬する。財政社會學と謂ふ特殊の意味は、財政現象の分析を以て社會理論の重點とした(註二七)ゴオルドシャイドに始るものであらう。

註二七　Goldscheid, Finanzwissenschaft und Soziolozie (Weltwirtschaftliches Archiv 9. Bd. S. 255)

Handbuch d. F., a. a. O. S. 148

ゴオルドシャイドは從來の財政學が財政現象と社會機構との本質的關係を看過して單なる行政技術論に墮して居ることを强調する。無論從來の財政思想と雖も、全然財政と社會組織との關聯を否定するものではない。前述の如く、カメラリズムは絶對主義時代の財政思想として、英國正統學派の財政理論は自由主義時代の思想體系として、各其當時の社會組織との關聯をもつて居る。併し乍ら、財政社會學はこの意味の內的關聯を理論的に認識し、且つ財政現象を社會機構との基本關係に於て理解し、進んで此現象の分析により社會自體の本質並に其發展的過程を理解せむとするのである。一言にして謂へば、綜合的經濟意志の政治的表現形態として現はるゝ財政現象に社會學の本質的契機を認めむとするのがゴオルドシャイドの意圖であつた。以下私は彼れの財政社會學の大要を(A)財政社會學の本質と意義(B)社會學の基礎としての財政學なる二部門に分つて之を說明しやう。

A——財政社會學の本質と意義

「財政學の對象と其內容とは何ぞや」と謂ふ問題に對し、「財政學は公的家計の學理である」と謂ふのが一般普通の解答であつた。此解答は無論不充分であるが、これを以て、財政問題の充分なる考察へ向ふ出發點とすることは可能である。即ち公共經濟としての財政には支出を支辨する爲めの收入源泉が必要である。併し乍ら、公的家計の學理としての財政學の特殊性は「社會的」需要を充足すると謂ふことに在る。從つて此「社會的」需要が問題の中心となるべきものである。從來の財政學は公的需要と社會的需要との嚴密なる區別を設くることなく、多く公的需要のみ

を論じた。財政學の固有且つ深遠なる諸問題が完全に理解されるところの、社會的及び公的需要の體系的整序を求めたものは未だ曾てなかつたのである。事實上、財政學は總ての社會科學の中で最も多く社會的に方向づけられ基礎づけられて居る。何故ならば、血族及び自然的精神社會體を除いては、財政體程、直接且つ密接に人間相互を結び付けて居る社會は存在しないからである。從つて、財政學に於ては、社會的認識、社會的基礎は欠く可らざる條件である。「財政社會學は公的家計の社會的被制約性及び社會發展に依て制約される其機能の理論である」。財政社會學は公的需要並に其直接的若しくは間接的充足を決定するところの其時々の社會關係を明らかにするのみならず、更に其紛糾と變動とに依て公共支出と公共收入との間に成立するところの相關々係を明示する。收入と支出とは社會的機構に於ける機能的相關々係（Funktionalzusammenhang）に於て理解されねばならぬのである。

財政社會學の最も重要なる主題は公的財政と國家との關係の研究である。今日迄、財政學と國家論との關聯が輕視され、而して國家の機能は主として其家計の機構に依て方向づけられ、豫算は同時にあらゆる觀念形態の粉飾を脫ぎ棄てた國家の骨組みであると謂ふことが充分に理解されなかつた。斯る基本的眞理が理解出來なかつたのは、國家學に於ても、財政學に於ても、其社會學的考察を欠いだからである。加之、社會學者に於ても、財政現象の意義が如何に基本的であるかを理解出來なかつた。斯くしてこゝに、次の如き主張が極めて力强く提出されねばならぬ――「財政社會學は一般に總體社會學に於ける鍵關（Schlüsselposition）である」と。

社會と財政と密接なることは、國家にまで派生せる社會が軍備並に財政組織の中に包含されると謂ふ事實に依て明瞭である。國家は個々の行政團體が軍事組織の要求する集中作用に依て、國民を權力的に支配する集團である。此軍事組織と財政組織との相關々係に關する考察が吾々の第一の任務である。この意味に於ける最も大なる發見は、財政現象の社會學が其大部分に於て戰爭の社會學に一致すると謂ふことである。即ち正しき財政學の成立は、一切の財政原理、財政々策を以て、戰爭の所產、準備、後草として考察することに繫つて居る。斯くして、從來平和の科學として建設されたる財政學は、事實上戰爭の科學となるのである（註二八）。

註二八　Goldscheid, Staat, öffentlicher Haushalt und Gesellschaft (Handbuch d. F. I. Bd) Ss. 146-149

B――社會學の基礎としての財政學

吾々は、今日最早や、國家の起源が社會契約に在るのではなくて、集團鬪爭に於ける征服者被征服者間の支配機構に在ることを疑はぬ。併し乍ら、斯る國家征服說はまだ充分でない。其國家、社會及經濟間の精緻なる相關々係を認めないからである。國家及び社會發展の基本的傾向が相互に並行して進むと謂ふ信念程誤れるものはない。國家機能の構成は、最も本質的なる點に於て、社會の機構とは全く異れる他の要因に依て決定せられる。社會發展の原動力は人間の生活必然性（Lebensnotwendigkeit）である。然るに國家の機構はこれと全く異れる契機に依て作出せられる。然も斯る要因は、內的のみならず、外的に於ても此完成に決定的影響を及すものである。集團の鬪爭は社會的機構の分化に對してと同樣、國家的機構の分化に等しても對しく甚だ重要なる要因である。

併し乍ら、鬪爭の殘す作用は國家に於ける場合と社會に於ける場合とに於て全然異つて居る。斯る作用の相異性

は國家と社會とが其の最初に於て既に對立して發生したと謂ふ事實である。

共同體は國家に先行する。故に、解決すべき基本問題は國家機構の萠芽として認め得べき比較的複雜なる組織が如何にして單純なる共同體の中に生成するかと謂ふことである。是に於て其解答は次の如くであらう――「一個の原始的共同體から國家的發展への基礎を創造する本質的原動力は其財政需要（Finanzbedarf）である」と。即ち共同體に於ける收入支出形成の結果が國家機構の基礎を組み上げたと謂ふことは極めて確實である。

鬪爭が國家の本質的構成者であることは既に述べた。而して此の場合、斯る鬪爭の影響が土地の併合、軍事行政の完成、征服者被征服者間の階級差別に及ぶことは從來既に考察されたところである。併し乍ら、これと並んで、戰爭に依て作り出される財政組織の國家機構分化に及す作用を理論的に考察したものはなかつた。

事實上、社會的なるもの（Das Soziale）を以て、最も高い意味に於ける人間的なるもの（Das Menschliche im höchsten Sinne）と同一視するのは大なる誤りである。社會的であることは vormenschlich である。從つて、單に國家生活を以て社會的自然關係に歸するならば、人間的國家概念と類似した意味に於ける動物國家と謂ふが如きものを說くことが出來るであらう。兎に角、鬪爭及び權力組織としては、人間國家は所謂動物國家と類似點を示して居る。其の間何等の本質的差別もなくなるのである。併し乍ら、財政組織（Finanzorganisation）の中に國家發展の根基を認めはじめるならば、動物社會と人間的國家組織との間に於ける主要なる相違が發見せられるであらう。

既に斯くの如き全く根本的なる理解に依て、吾々は財政學が國家の社會學に對する中心點であることを發見し、而して財政史の中に、國家史に對するのみならず、更に國家機構及び國家機能の研究に對する進路を求めねばならぬ。茲に財政學の基礎的改造が行はれるであらう（註二九）。

註二九　Goldscheid, Finanzwissenschaft und Soziologie (Weltwirtschaftliches Archiv, 9. Bd., Ss. 253-256)

從來の財政學は財政史の敎ふるところを認識理解せざりし爲め、其確固たる理論上の基礎を欠いだ。財政史的研究の欠如はまた國家の本質的論究を妨げた。從來の財政學の對象となつた國家は單なる出發點としての幻影國家であつた。併し乍ら、國家が財政需要に依つて共同體の中に派生したとき、其處に嚴密なる階級差別の自然的事實が既に生じて居つたことは否定出來ぬ。財政學は斯る事實の認識の上に建設されねばならぬ。今日吾人は、單純なる記述的財政學を淸算し、社會科學並に財政學の全機構を根本的に改訂すべき必要に迫られて居る。何故ならば、社會科學に於ける實在論も觀念論も、共に所與の美化より出發する限り、常に擬制主義形式主義に墮するからである。從來の見解に從へば、財政學は公共體の收入支出に關する現實的記述である。斯る純粹の記述と謂ふところに嚴密正確なる研究のアルファとオメガアを認めたのであつた。即ちこのことが從來の財政學に於ける唯一の方法論的原理であつた。然るに事實は、法律の擬制、經濟の擬制、國家の擬制、財政の擬制に依據して居る。而してこの種の擬制を恰も跳動せる現實であるかの樣に見做し、これを論究の出發點として居る。斯る一切の社會的幻像の中に、財政學に於ける禍福理念が暗默の前提として作り上げられるのである。併し乍ら、一般的禍福とは如何なる意味のものであらうか。惟ふに、一般社會科學に於ける核心としての禍福概念程非分析的なる理念はないのである。吾々は先

づ斯る擬制より脱却しなければならぬ。即ち財政學の基本的前提は財政現象を社會理論的に觀ることであらう。而して、財政の編成並に決定が社會的發展の全體に對して演ずるところの役割を最初に說明するものは實に財政社會學である（註三〇）。

註三〇　Handbuch d. F. I. Bd, Ss. 149-162

「社會の財政需要が國家の最も重要なる一般的要件を創造する」ことは既に前述した。斯る社會的財政需要が大となるに從つて國家的機構の網は益〻緻密となるのである。而して外敵に對する統一的軍備組織は斯る國家構成に於ける一個の重要なる根基である。これ、戰爭が固有な國家構成者としての力を持つ所以である。戰爭は集團の規則的生活を破壞する。吾々は、國民を以て第一に國家に對する防禦力並に稅源として考察することを疑ぬであらう。戰爭の最も主要なる結果は國家の收奪である。稅源は涸渴し、國家は無所有に陷る。斯くして、吾々は國家史を以て第一に租稅史及び國家負債史である謂ふことが出來る（註三一）。

註三一　Goldscheid, Finanzwissenschaft und Soziolozie (a. a. O.) Ss. 256-7

法律は經濟の上層建築であると謂ふが、これは完全でない。法律は國家的財政組織の上層物と觀る場合に、創めて其本質が理解される。國家組織の全體は一個の純粹なる必要產物である。共同體內に於ける統一的集團の財政需要を蔽ふ爲めに、公的手段の調達が益〻大となるに從つて、全體の個々に對する內的依存性は愈〻增し、個人に對して全體の支出を支辨せしめる爲めに、愈〻其機構は擴大される。茲に國家の資本隸屬性の發展がある（註三二）。封建制度下の領地並に特權國家は戰爭に對する支出の爲めに無所有に陷つた。而して、資本主義下に於ける國家は、自己の經濟的活動を失つて所謂租稅國家となつた。租稅國家は私的資本への隸屬を意味する。新興ブルジョワジイにとつては、彼れ等の庇護に依つて僅に所得を得るところの貧困國家が望しいのである。蓋しブルジョワジイは自己の權力が國家の貨幣を取得せむとする目的と一致することを知悉するからである。この爲めに、彼れ等は國家を收奪する。國民に對する租稅の搾取者であつた國家は、今や、國家の債權者に依つて搾取される。何故に今日國家は政治的に全くにして經濟的に無力であらうか。この最も內的なる意義を示すものは以上の如き負債國家の理論である。併し乍ら、斯る貧困國家は結局必然的に生產の桎梏となるであらう。困窮せる國家は收奪者を再び窮迫せしめるところの國家となるであらう（註三三）。資本主義社會に於ける國家の必然的本質は、確かに、無所有國家、負債國家、租稅國家の必然的本質であつた。これを決定するものは財政需要の問題である。併し乍ら斯る貧困國家は必然的に所有國家に移るであらう。既に今日、國家發展の完全なる新象相が現れて居る。即ち負債國家より生產的經濟國家への發展である（註三四）。

註三二　Goldscheid, Finanzwissenschaft und Soziologie (a. a. O.) S. 258

註三三　Goldscheid, Handbuch d. F. I. Bd. (a. a. O.) Ss. 151-3

註三四　Goldscheid, Finanzwissenschaft und Soziologie (a. a. O.) S. 259

無所有の國家に對し凡有る社會問題の解決を求むることは不可能である。其は前述の如き富有國家に俟たなけれ

ばならぬ。「富有なる國家のみが正當國家であり得る」（註三五）。斯る富有國家に於て創めて「人間經濟」が成立し得ると謂ふのがゴオルドシャイドの財政社會學の歸着點である（註三六）。

註三五　Goldscheid, Handbuch d. F. I. Bd. (a. a. O.) S. 156

註三六　ゴオルドシャイドの財政社會學に就ては之を獨立の論文として取扱つたものに大內兵衞教授「財政社會學」（經濟學論集第六卷第三號）及び米原七之助氏「ゴオルドシャイドの財政學說と其批判」（經濟學研究第二卷第二號）がある。本論文と併讀せらるれば幸甚である。

五

私は以上の說明を以てゴオルドシャイドの財政社會學に於ける要點を大體明らかにし得たと思ふ。然らば此理論に對して如何なる批判が與へられるであらうか。先づ問題を包括的に觀て、此財政社會學はまだ完全なる理論的體系を具へて居らぬと謂ふことである。例へば、ゴオルドシャイドは、其說明の途中に於て、或は財政學は社會理論的に基礎づけられねばならぬと謂ひ、或は財政學こそ一切の社會理論の槓杆であると說く。併し乍ら、此二論は無論兩立しない。何故ならば、若し財政學が社會理論の槓杆であるとすれば、財政學を社會理論的に基礎づけると謂ふことは無意義である。財政現象の游離的分析が社會現象の本質を明らかにすべきであらう。ゴオルドシャイドの意圖は無論後者に在る。從つて「財政需要」の理論が彼れの財政社會學に於ける核心と謂へる。故に問題の根本的批評はこゝから出發しなければならぬ。共同體は國家に先行する。これは異論がない。こゝで、ゴオルドシャイドは「財政需要」、「財政組織」を以て國家機構發生の原因と觀、此有無に依つて人間國家と謂はば動物國家とを對立せしめる。併し乍ら、斯る「財政需要」の概念は究極的意義のものであらうか。此の場合何が「財政需要」を決定するかと謂ふ問題が提起されねばならぬではなからうか。國家を以て共同體內に於ける統一的集團と觀る限り、其が組織の輩固を圖る爲めに財政組織を持つことは疑ない。ゴオルドシャイドは、財政組織を惹き起すものは鬪爭であると謂つた。斯くて鬪爭の理論が解決されねばならぬ。即ち鬪爭は人間の本能であると謂ふか、或は集團內に於ける支配者が自己の利益の爲めに集團內の結成を圖り、進んで他集團を征服して行く過程であると觀なければならぬ。彼れは無論後者を主張する。然らば、財政需要の原因、財政組織の目的は權力の理論に依つて解決されるものである。ゴオルドシャイドは從來の征服說權力論を以て不充分なりとし、「財政需要」の問題を提起したが、其は結局前者の補論若しくは其材料に過ぎなかつたのである。今假りに「財政需要」を究極概念とし、唯だ此の客觀的條件に依て人間國家と動物國家を區別するならば、其は寧ろ人間と動物とを本質的に同一視することにならう。ゴオルドシャイドの如く、其「人間經濟」を社會生物學的基礎によつて說くものには、僅かに論理上の統一があるかも知れぬ。併し、彼れが「財政需要」を以て人間國家を所謂動物國家に對立せしめたと謂ふことが既に本能的社會としての動物國家と目的意識をもつ人間國家との相異を示すものである。蓋し財政需要は人間の目的意識に依つて發生するものだからである。財政學の主題となる公共體の目的意識は則ち政治意識である。この意味に於て、私は財政學に於ける政治的方面を强調するジェーズに加擔する（註三七）。ゴオルドシャイドも亦、財政史の分析に於て此立場を採つた。故にズルタンはゴオルドシャイドの財政社會學を評して、經濟社會學の問題性を無視した、單なる政治社會學の一部門に

すぎぬと謂つた（註三八）。併しこの批評が問題の中心に觸れて居らぬことは前述の通りである。又セリグマンは財政社會學に對して次の如き批評を述べて居る。

「ゴオルドシャイドの財政社會學は二個の地點に基礎をおく。一は健全であるとしても新しきものではない。他は新しくはあるが誤謬である。即ち第一の理念は、凡有る租稅は本來戰時に於て課せられるものであるから、財政學は平和の科學ではなくて戰爭の科學であると謂ふことである。殆ど總ての著作者は大部分の租稅が戰時支出を支辨する爲めの非常手段として發生したと謂ふことを强調する。併し乍ら、今日迄戰爭の狀態が原則であつて例外ではないと敎へたものは誰もない。以上の歷史的事實は、無論、近時に於て戰爭が例外であつて平和が原則であると謂ふ明瞭なる考察と衝突しない。また、戰爭並に戰爭準備の支出は比較的に年々減少しつゝあり、急激に擴大しつゝある地方財政の領域に於ては殆ど何等の役目をも演じないと謂ふ考察と衝突しないのである。財政を戰爭科學と呼ぶことは、恐らく獨乙に於ける現在の苦境に照して說明さるべきであらう。併し一般的說明としては不合理である。他の點は更に主張し難い。其は『國家の收奪』と謂ふ新理念から成つて居る。『舊時に於て、國家は富有であつたが故に事實上何物かに相當した。其は大なる公有地を領有し、多くの財產を持ち、然かも企業を行ふこと少かつたと謂ふ點に於て然うであつたのである。現在、國家は貧しい。而して他のものに依つて支持されねばならぬ。今日の國家は「經濟的無力」に依つて影響を受け、その故に、政治的に弱い』。『國家所有』の斯る注意すべき理念は本質上中世的のものであつて、政治生活の近代的概念に於ては何等の根據をも發見することが出來ぬ。若し斯くの如きが財政社會學に於て意味されるものであるならば、社會學と財政學とを混同しない方が双方にとつて一層宜いであらう」（註三九）と。

斯る常識的なる批評が問題の中心に觸れて居らぬことは許すとしても、ゴオルドシャイドの說明とセリグマンの批評とは孰れが現實的妥當性をもつであらうか。私は前者に於て却つて現實財政現象の特徵がよく道破されて居ると看るものである。セリグマンは自ら、今日吾々の努力すべきことは財政學の社會理論を少くとも其輪廓に於て示すことであると謂つて居る（註四〇）。果して然らば、ゴオルドシャイドの財政理論は少くとも彼れの批評以上の價値をもつものと謂はねばならぬ。特にゴオルドシャイドの說明は從來の學說に對する批判に於て勝れて居る。「從來の財政學は單なる記述的行政技術論にすぎない」と謂ふ點に於て私は全く彼れに贊成である。其歷史的・社會的被制約性を忘れるとき、其れは然うならざるを得ないであらう。從來の技術論から財政學を正しき方向に向けたと謂ふ意味に於て、彼れは確かに、ドゥニス、ド・グレエフの主張を一歩進めたものと謂へる。ゴォルドシャイドに刺戟せられて、イエヒト、ズルタン、マン等が、或は歷史的哲學的に財政類型を分析し、或は說明契機（Deutungsmoment）の問題よりこれを理論的に擴充し、又、經濟社會學との連繫に於て正しき財政學の意味を明らかしやうと努めたのは、財政學が何等かの形態に於て社會理論上の解明を待たねばならぬ所以であらう。斯る意味に於て彼れは財政學に於ける一轉機を齎らしたものと謂つて宜いのである。

註三七　Gaston Jèze, Aspect politique des problèmes financiers, Festgabe für G. von Schanz, I. Bd.

註三八　H. Sultan, Die reine "Theorie der Staatswirtschaft und Besteuerung" und die Finanzsoziologie, Archiv für Sozialw. u. Sozialp. 59. Bd. S. 150

註三九　E. R. A. Seligman, The social theory of fiscal science, Political Science Quarterly, vol. 41, pp. 194-195

註四〇　Seligman, op. cit., p. 194

追記――私は、はじめ、問題をもつと包括的に取扱ふつもりで筆を執つたが、餘りに長くなるのを恐れて一往擱筆することにした。殊にゴオルドシャイドの財政社會學に關する部分では、彼れの學説の基礎となる「人間經濟」の理論に就いて説明を加ふべきであつた。他日補論を書き度く思つて居る。（一九三四・一・一三稿）。

一七八九年のフランスに於ける貴族階級

小泉順三

目次

一　貴族は君主政の本質に入る
二　貴族は如何にして君主政を崩壞せしめたか
三　貴族の奢侈
四　貴族の生活資料は何處から來るか
五　貴族とブルジョアジーの接近
六　貴族は國家財政に寄食す
七　宮廷貴族と鄉土貴族の對立
八　生活及思想を異にする兩型の貴族
九　第三の民主的貴族
十　結論